名古屋
山三郎
不破
伴左衛門

繪本稲妻表紙

一

13
183
1

於
188
1

東京帝國大學
史料編纂所

東山八景

見わたす方はいとしやはるかなる
見やらるるにゆくあらしの山市の晴嵐と
うちのぞくなる河原なるてのまちはいろふ
江天の暮雪とうたふ人もむかしの
きやうしにたれさらにたふとし
賀茂川のながれのとをみゆくゆくまで遠海
乃帰帆のさまもうつる清水寺はるまのうち

明治廿三年十月十日千葉縣藏氏寄贈

煙寺の晩鐘ひゝくに猶さゝ川のせゝらぎ
はたゝかの散乱すい平沙の落鴈こゑいと遠
さゝくまこうきむの月うけて洞庭の秋の
末ゆゑまつよもすがらさゝめ海の漁村の
夕照ふけてこゑのふかの紙

香はたゝ

六十一種まつ名ゆゑ法隆寺東大寺道遥こゝろみ
紅塵結末まつ川法華経をそれぞれはかる

やはらぎ園城寺仏のゆゑ不二のれんげもつゝ
ゆ金光殿若鶴鴨沼あり梅揚貴妃ゆゑ梅
ゆゑわすれ沒みを法ゆゑ月龍田のみちの紅
斜月白梅千鳥や法華光梅やゑ・うきゝ
花の雪ゆかれ雪名月賀蘭の年橋ゆゑ紅里
丹霞ゆゑ乳ゆゑみをふかゆゑ須磨あゆ十の枝
陣家夕岡雨ゆゑ月ゆゑ有明ゆゑ井ゆゑ
ゆゑ月ゆゑ寒梅ゆゑ紫早梅ゆゑ枝ゆゑ

稲妻の
見うり
不破の関
荷翠

傘か
ふぐり
かさふぐり
めと燕
其角

おどや山三

不破伴さぶろう

傾城の
賢かるハ此
柳うめ
其角

ゆうぎりさま

[illegible]

右東山の京書堂三曲をむすび室町殿の御所と
[illegible]京堂はしるもしふ敷ともむそのち
[illegible]堺の湾高三隆遠しい老婆[illegible]と
[illegible]たのうもてうつしよりちへて隆[illegible]を
[illegible]て世を感のけ時代よ固あるとをてもらたるつ

僊風道骨

胚胎逞慾

○不破道犬　伴左衛門丈

其角

あの声ぐ
石蜴
くらくら
時鳥

回雪飛僊

○白拍子藤波山魂

鬼貫

骸骨の
うへ式
粧ふく
死見哉

食物も
喰ふ
水くさし
魂祭

嵐雪

水寒陰薄

○六字南無右衛門

ゆふぎちや
細首ちうす

大井川

宗因

畫足蛇皮

○丹波國因果娘

蛇くふと
さのぢ
おそろし

雑子
乃恵

芭蕉

守節握符

○貞婦・礒菜

言水

花瓜や
紘とかしられ
琵琶の上

天機心匠

○浮世又平重起

大津繪の
筆乃ちしわい
何佛

芭蕉

裂石穿雲

○佐々木桂之助國知

其角

七月々暮露笛を聞

又平妹於竜

夜動畫藏

○銀杏前

其角

嵐

闇のひま

非風非幡

○舊家怪

水風呂の下や紫山子が兒の終丈草

昔話稲妻表紙總目録

巻之一

一 遺恨草履　二 風前燈火　三 胸中機関

四 荒屋奇計

巻之二

五 厄神報恩　六 因果小蛇　七 呪詛毒鼠

八 暗夜駿馬

巻之三

九 辻堂危難　十 夢幻落葉　十一 斷絃琵琶

巻之四

十二 修羅大鼓　十三 霊場熱閑　十四 仇家恩人

巻之五 上冊

十五 孤鴈楓楯　十六 名畫奇特　十七 雪溪非熊

十八 花柳鞋當

全 下冊

十九 刀剣稲妻　二十 積善餘慶

以上

通計二十回

總目録終

昔話稲妻表紙巻之一

江戸　山東京傳編

一 遺恨の草履

今ハ昔人皇百三代後花園院の御宇。長禄年中。足利義政公の時代。雲州尼子の一族ふ。大和の國と領と。佐く木判官貞國とゝ人あり。兄弟二人の男子をもてり。兄ハ桂之助國知といひて。今年二十五才あり。弟ハ花形丸とゝ十二才あり。兄ハ先妻の子。弟ハ後妻の蜘手の方とゝふ出生しゝ子なり。桂之助の伯父ふ藏人貞親とゝ人あり。是則判官貞國の弟なり。ゆゑふ一万町の分地を与へ同國平群ふ別館を造りて住おきけるが。一人の娘をまうけ。先ざりて夫婦となりふ名まうけ。その息女容顔美麗なり。成長の後。桂之助の内室となり。名を銀杏前

とのの夫婦中むつまじく。ほどなく男子誕生あり。其名を月若といふ。
今年七才かぞへなりぬ。其比義政公京都室町に新館を営て花の御所
と号し。兼て花車風流を好こゝろひ。近仕の士も列侯の子息のうちより。
美男を撰ばれ。召つれ給へり。桂之助兼て美男のきこえのふしり。山
撰びふくて京都にめされ。右近の馬場の旅館に住室町の御所に通ひて
勤なり。山岸桂之助はもとより上京して家士へ。執權不破道大に一子。
不破伴左衛門重勝。長谷部雲六。笹野蟹蔵。藻屑三平。土子泥助大上
雁八等なり。去程に桂之助妻子へ国に残置き其身独長く在京御所
勤の氣弱けれども少年。頃日い病にふかうして折々悩み給へ一時家士
等。桂之助が前に集。伺ふる殿の鬱結と感ぜ支りやと評議しつゝ
尚家の重宝に。巨勢の金岡が画とる。百蟹の圖とる。百種の蟹がかゝる

繪巻物なり室町殿なり。古書画を好こゝろふかりし。伴ゆふ達し。伴覧
あるべきよし命ぜられければ。国元より。名古屋三郎左衛門が一子名古屋
山三郎元春。彼巻物を携へ上りぬ。名古屋館に逗留して
なりぬる。兼て大殿中楽を好給ひしゆゑ。山三郎武藝のいとまに乱舞を学
びて扇ちらして名誉の者なりけるに。皆〻口を揃へて山三郎
上京こそ幸ひなれ。かゝる一さし舞御覧ぜよ。彼が舞は国元
にて度々御覧なれ。変なれば。相人なくて奥のまし。頃日持めく
白拍子に藤波とやを女なり。年は十七才のよし。歌舞吹弾の業も
達し。もっとも類まれなる美女なり。古の祇王祇女佛なりとふもとさく
ちらくさる者なり。彼を召て山三が相人なり。乱舞俳優を催ふ
べしと。伴左衛門とくとくわられとも。桂之助

大に悦び夫はおもしろき興あらん。急ぎ催すべしと命じければ。皆よくかしこまりて程なく遅れつぐる日彼藤波および囃方と召よせ。山三郎ハくわへて乱舞俳優とさせ美々しく酒宴をはじめける。大に興を催しありかくて山三郎藤波ふかさく種々の舞ありて後。酒飲の乱足。西寺の胤舞無力蟇無骨蚯蚓の道行あり。福廣聖の袈裟求妙高尼の繦緥乞などいふ両人立合の俳優ありて笑ひを生じ。終にいたりて藤波男舞といふ秘事を舞ねば。これは昔後鳥羽院の御宇。通憲入道讃岐の磯の前司といふ女に伝へさる舞なり。金の立烏帽子。白水干に紅の大口をはき太刀をはきて立舞なり。誠に沈魚落雁羞月閉花の容ありしもすがたを袖は鸞鳳の舞にひとしく歌うたふ声は頻伽の囀ずなくあれば皆人感にたへ奇妙の舞妓やと賞嘆の声しばらくはやまざりけり。

此時より桂之助藤波と恋そめて病はのがれへ去只其川の水胞になれて恋の淵となり。舞と云ふに事よせて度々めしよせけるが。つひに僕友尋のぶもしろひたらく藤波と桂之助の妾にめしかへ館に引とりて給仕させけるが。桂之助望たりき最愛深くめしはべりしが。これが妹に於藤とて今年十三才になる少女のありけるとこれとも館にめしよせて。藤波がそばづかひにさせぬ。藤波も桂之助が美男なるにめでて誠心を尽し鴛鴦の契浅からざりしが。桂之助もものづく御所の勤仕なきそのふありぬ。されども佞臣等はこれを幸とし。昼夜かさねてなる逸ぞ。姧邪の人をあつめて。酒宴媱楽にのみめしよせてさせ。旨酒珍膳席上にみち。郢曲謳歌室中にかまびすく。恰も妓家娼門の所行に似たり。うちそめりける形勢なり。山三郎逗留の間此為体を見聞して。只

独胸とつくめ安さ心ハせざりけり。ちゝ母ハ伴左馬のかどゝりゝ。
友波ハ哀慕。千束の艶昏とおくるといへども。藤波ハ手ハもふれず。
尺〳〵これ伏めぐ〳〵。一言の返答ぶせず。伴左馬一向ちひさごま
らど。折とうやひ。ゑま伏尺〳〵。おそらをめ一つやさくく友波ハじ
めハ彼が恨憤らんをおそれて。心一ツハとさめおさりるゞ。今ハやむこと
を得ず。桂之助ハ艶昏と尺せ〳〵。彼ハふるまひとつぶさふ告ぬ。桂之助ハ
短氣の生れゝるゝへハ心狂〳〵かりゝる時あれがこれをやとひたしく
奮然〳〵怒氣天ハさるのゞり。ゑゞ伴左馬つを出ぬ。の艶昏
とくりひろげ〳〵ひけれ。汝友波ハ不義といひゝ。数通の艶昏と
おくる条。罪科甚重〳〵。後日の尺せ〳〵ハ。我こんゝ〳〵手ゑくくとと
ありといひをめへど。白鞘巻を抜くゝ〳〵けまぶ涙の間ハひくゝる

山之郎いとゞゝ〳〵走出。袖ハとりて押ゝわ。詞を尺〳〵てみざめける
ハゞ。ゝ〳〵力をおさめ。ゝるゝ〳〵へハ汝ハめで〳〵一命をたゝけ。長く島尚を
ありゝ〳〵。めさゝ〳〵ハ命ゞ〳〵。伴左馬ハ大小をもゞゝ〳〵せ。庭上ハうまろさ
ゝめけるハ。伴左馬ハ一言の分説あく。只打ゝられゝゞ伏居ゝる。桂之助
山之郎と顧ゝ。汝上草履と以ゝく。伴左馬ハ面を打。辱め伏ふへとと
命ゞ。山之郎頭をさげ。伴憤ハうべなれゞゞ。さゝゞぶ彼ハ執權職伏
ゝる道犬ハ児子めて出べ。この侍ハいとまつゝハされくゞこれしと顧ゞ。
ゞ入ゞいゝ〳〵彼ハゞこゝゝ人畜ハ面ハ糞汁ゞゝ〳〵ゞも飽〳〵ゞゝ〳〵
打よゞし我命ゞ背ゝ。いきまれつゝふ。山之郎おれゝゝ。ゝ伏背
ハひゝゝ。傍輩の因身武士の情ふゆへ。辱ふゝのびゞ。押〳〵願
ゝ〳〵ゝ。仇の宥免ゝ〳〵。汝若打ゞんべゝふ

佐々木桂之助
恐て家士名古屋
山三郎が命じ上
草履をもって
不破伴左エ門が
面前に
打しむ
桂之助
おとく

藤波
名古屋山三

勘當あり。打べきや打まじきや。返答せよと。せきふせたる詰ー
けるに。山三郎もろ〳〵に非ふ及ばらぢ。いとでゝ違背仕るべきとて。
袴のくゝり引めげ。上草履をとりて庭ふとり立。庭下駄をあ〳〵く。
紀石城つゝく。伴左衛つが傷ふちづれ。義命あれば申をべゝ。かゝ〳〵ぢ
恨あふなと。耳ちゝいひさけく。草履をめげ。面とかけく一打うち。
退んとをれを。桂之助様先ふ出て一見ー。あゝ手弱ぢ山三郎。数の〳〵
打〳〵辱めらとめふせけるべゆむこゝ成得ぢ立りぢり。又ちと〳〵こ連打
ふ打〳〵ふぢ。伴左衛つが鬢髪乱れ〳〵えるふちのびぬ
形勢あり。桂之助呵〳〵と打笑。こゝ〳〵彼をえよこちよれ見物ふあ〳〵
ぢや。こゝ引〳〵〳〵後門より追拂へと命ぢ。ぢ〳〵奴僕等割竹を
とりて庭づゝひふ出来り。いざ〳〵〳〵追立けるべ。伴左衛ちふ〳〵

立めぐりて。ちぐうふ衣服の塵を打拂ひ。山三郎を尻目ふ見〳〵そいて
めたねこんぢ遺恨の起〳〵〳〵後かぢちん〳〵〳〵後山三郎。
ちぐ〳〵諫言とりちひけれど。桂之助聽ぢはへつと。佞臣等ー
山三郎をふざけんと計。向めー〳〵ちるふより。桂之助山三郎ふ
召出ー。百鱗の巻物ぢ覽をぐ。仕方より別人とふく りをべー。
汝が役目ぢ〳〵れ〳〵いとづゝふ在京せんも親人のおもと所ぐ。
とり〳〵飯國いとづとめれば山三郎心ぐとぐ君命ぢ。
俄ふ行装をとのゝ〳〵固えへまちくぐらめ。ちりしより後の誰修る者
もゝく。室町の御所へ重病と披露ー〳〵出仕をやめ。日夜の酒宴
糸竹の調ふ。春の日を暮あんこゝ成晃かゝ〳〵。秋の夜も短〳〵と
月ふやちち。更ふ本性へあり けるを

㊁ 風前の燈火

爰ふ又。此旅館とのゝ家士ふ。佐〻良三八郎とゝ。忠臣無二の者
なりけり。そゝ〻妻子おびて当館中ふ住けるが。山三郎 飯岡の後
へ。桂之助の刃持益めゝ〻 成行くると沙く悲〻。主君の前ふ出〻
諫けるふ。虚病とかまへゝ〻ゝ。旅館ふ妾とめしつゝゝゝふ放佚
無慙の御行跡若室町御所ふきこえあり。ゆゝしき大変。御家ふを
かゝるこゝふちんつゝ。ひねもすゝゝ芭蕉ふいゝをつゝへられ。御刃持と
めゝゝめくゝるゝゝと。伽の燈るあもふ。ゆゝしきとのゝゝ。ちゝゝ
諫言せゝゝるゝも。桂之助耳あも実のゝゝ。日ふおひて悪行けるのゝゝ
こハ郎熟おりひけるへかくなゝゝ詞を尽〻理を紙て諫まゝゝふ。御家
入かゝゝへハせんゝべゝ。これ畢竟芭蕉が邑香ふ迷ひゝゝゝゝ。

彼わゝん限ゝへゝふ諫ゝゝゝも悪行ゝむべゝゝゝ。根をゝゝて葉をゝゝ
ゝの枝ゝおれゝ。折をうゝひ芭蕉を殺〻。おの〻腹かきゝぶりて死ゝふ
ゝゝ。科ゝゝ女を殺ハ桂ゝゝゝ。御家ふハゝゝゝ。越の范蠡
西施を呉湖ふ放ちゝゝ例もゝゝのとと。ゝゝふ心ゝ決〻ゝゝ折を
がのとゝゝ居ゝゝふ。一夜時ゝゝゝ夜嵐の烈〻ゝを幸ひと。身軽ふ
打扮ゝ奥庭ふものび入。樹木の茂〻ゝ所ふかくれゝ。芭蕉が部屋
ふ下ゝゝ待居ゝゝ。芭蕉ハゝゝゝとハ嘉ゝゝゝ。子ゝゝゝ比殿の前を
退ゝ。ゝゝ碎の機嫌ゝゝ。ゝゝゝ手燭とゝゝ。濃紫の小袖のゝゝ
ゝゝゝて。長ゝ廊架を歩ゝ来る。こハ郎かくとゝゝゝゝ氷ゝゝゝ刀ゝ
抜ゝゝわ。今ゝ盛ふ咲乱ゝゝる。山吹躑躅。早咲の蕊子花を踏ちゝ
ゝり水の流ゝゝゝゝる。庭石をゝゝ越ゝ。廊架の手ゝゝの下を

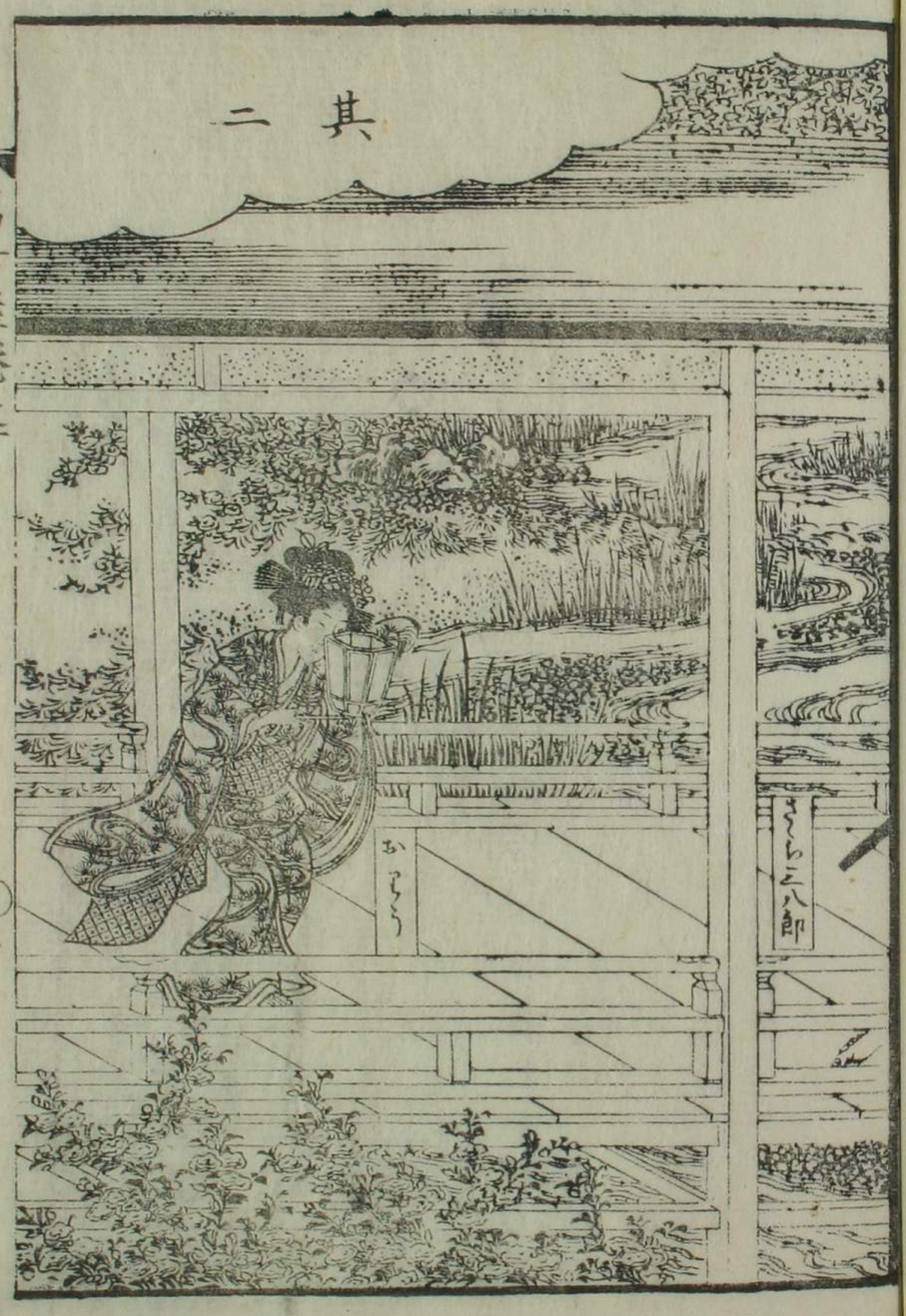
佐々木の家士
佐々良三八郎
忠義の為
白拍子
藤波と
殺と
佐々良三八郎

藤波

つゝひ茂波が跡をつけ〳〵。今や斬んと〳〵つけぬ〳〵ふ。茂波いかのゆもの〳〵
歩つゝけるが。此時一命の終らべき宿世の因果かやゆり名。風雨まも〳〵
つよく爛熳たる庭木の櫻を吹ちらし〳〵。吹雪のごとく散ゆり。手
燭を颯と吹けして忽真の闇となる。嗚呼彼が命の危さもげか風
前の灯火あり。茂波進退を失ひ心たゆひなる而か暗裏か剣の
光り電光石火と閃きなびき驚き〳〵逃ぬんとする処。二八郎とぎり
ゆる〳〵斬つけるが。暗中うれば目前ちがゝ堂を斬ぬれとて又斬
剣の下をくぐりぬけ〳〵。猶逃去んとしけれども。餘りか驚き。身うち
ひき震足のぐ〳〵走るとあしかを。夢路か迷ふごとくあり。二八郎は
息をうしなひうと探り〳〵立まとりめつゝ斬か きりけるかを。茂波
振袖の袂を斬落され。危く身へ避されども。目前か剣のひ〳〵く

なびく胸冷魂きえて。黒暗地獄の罪人か剣樹かのがるかとるゝごと。二八郎は
ひまとりて。仕損ぜまじと心せえん。衣かとりる蘭麝の薫る方と心為
ふ。うつひをまつ〳〵斬つけられば。手ごたへ〳〵呀とさけぶ。仕をはし
きりとさゝこうひてきるかとおのれひ茂波たまさらる声とりふ。
のけさるふるゝ。背後ある杉戸ぐるまを。ばかりゝ噇と倒る時か
奥深くたとさる。燈火の光さもれ来るか〳〵。ちの形勢をるる。
無慙やな左袈裟か斬さげられ。鮮血泉のごとく涌流て身うち
朱か染り。手足とかゝ。歯とかゝ〳〵〳〵苦む体。ゝ目をあて
かゝり。二八郎せめ〳〵苦痛をさとゞとひつ。糸かゝて吹かゝめの
力をさ〳〵とれを。嗚呼悲哉。嗚呼痛哉十七歳と一期ゝて。黄泉の
鬼とさりかゝり。〳〵て二八郎袖引ちぎりて血刀かまえ。耻しくう

其二



ろげ。已ふ腹かつきたくんとせ〜ず。俄ふ やりひるわり〜ろへいみく今
死そべき命ふわ〜ど。人の及ぶめぬこと幸なり。不破道犬が為体
お家と乱そべれきざ〜わり。これもそぐふ出奔〜。權令とるぐ〜へて。
こもあぐ〜主君の目代こそあり。彼が悪意をえわ〜い〜。其後山茨波が
所縁の者の。恨の刃ふわ〜〜〜〜死んこも武士の及ぶべ〜こ心とさざめ
て乱戰ふむ。忠義の為こんいふあぐ〜。科なくて公無代ふ殺
せ〜。不便さ〜。ぶ〜山方も刃ふかる。冥途ふおいて分説せんと掌と
合せ。南無阿弥陀佛〜〜と。口の裏ふ回向〜て。退き出んと〜〜る折〜も。
茨波が妹の放髪。姉の下りのつるもり遅きを案じ。むひの乃手燭と
らり〜て伺の心もあ〜山ぶ来ぐる。こ八郎と顔見合せ。山血ふ
ちとおぐろ〜〜。色〜とくんば。こ八郎手ぐや〜刀の鉦打ふ手燭とろ

〜と打落し。吻とさあ息つきもめへど。又庭つ〜ひふ辺ふ立ぐる深夜と
ふ夜嵐ま〜も〜烈〜くんば。誰一人くれと知者あるぐるかて。こ八郎
我家ふへり。妻磯菜ふもりぐの支を語り。いちやふ〜。彼も度え。
ぐ〜ふの金子を懐ふ〜。おの五ふ今年十二才ふる楓といふ娘をせおひ。
妻ふハ七才ふなる栗太郎といふ男子をおりせ。夫婦ものびやうふ
後へ〜ふ逃出ぐる。四方暗〜〜〜て東西を辨ぜど。雨ハ中つよい降
て袴をしぼりぐ〜〜くんぐ。雨衣とぐふ刃ふつけねば。濡衣足ふ
ま〜〜ふつ〜〜歩こぐ〜。素足ふれば及ねりて心の〜前ふ走り
刃ハわ〜へ〜ぐ〜〜〜〜。おぐへど背後と顧ぶ。怪哉心火ぐつと燃
ぐる茨波が姿やげるふのぐ〜〜〜〜〜〜。行とや〜ぐと引ぐむ。
こ八郎時分ぐ〜ぐと冷ぐ〜ぐ力を抜く斬ひ妻乃

手をとりかくしひろめへ又ぢうと炎燃て。花波が姿をくと立。あり
じとさへうり。妻ふの間ふいふるへねもこ八郎が目前ふいまがろ〜の
ごくつきまとり。此ふめ〜のれ板延ふ立〜。斬ど杙へど立さ〜ず。勇氣
烈しきこ八郎も。弟うちまびき足をへぎて走ることいとど。妻乃
礦業もあるふたぢく〜とひとされ。髪と舌をりとと破き。
弟怪もくこて倒まし〜。やうく心を雨して。百歩だうも逃去時
烈風颯とおろ〜来く。大粒の雨つよでを打がごく降かゝる。園の心火
あくく逆て亮来う。ろく〜実中中〜二ふ行ふん。一ふハ娘楓が棲ふ入。一ふ
ハ栗太郎が懐ふいりぬ。是乃花波が死霊。兄弟の児をふつき恨を報る
一端なり。かくて夫婦こけつまろびつ。走ふ走り。辛じて逃ふ逃
のび先ハ怪憑きなきんが赤びろ。此時ふいこうて中〜風雨おさまり

雲これく朧月さ〜出。草の緑ふ影うつるを便ふ北山をと枕坂とよう
あまりふ息とゆくれば。茂林のうちふいり。夫婦背上ふ人のふと
おろ〜て岩の上ふ尻うけ濡衣をたゞり。清水ふ咽をうるおし〜あく〜て
權ふ〜ふ居う折〜も坂のうへより若うく〜しき女ち〜髪素足
ふてねうりをとびをよくと歩こ来ぬ。よく〜見れば行ふるめ〜ん烟の
ゆうふて。壁人のごとく。人の形まるゝ。女の前ふ立。糸のゆうある手を
あけく〜さ〜まねく〜ま結けバ女足をそやく〜歩む。まねうざれバ女立
ぐまう。頭を傾て物をおのふさゆうう。女立ぐまれバかの怪物。又手を
あげてさ〜まねく〜かく〜もつ〜も女。舊榎の下ふ〜ふり權〜ぐ〜てさゆぐ
と泣居〜るがかの怪物梢をゆびさせバ。女あくぎ見てうるづんおふさめく
と泣涙梢の雫とおちかゝる。怪物又榎の枝をゆびさ〜。物打うくる仕方と

佐〻良三八郎
藤波孫殺し
妻子を奥〻
逃れく途中
ホ〻首縊
女孫救ふ

それば。女うなづき前後を顧て。ずて腰帯を解て木の枝ふ打かけうち
三八郎妻らくもふ。本落の暗所ふめり。此為体とゑ〳〵暗ふそひるへ。
彼恠物ハ世ふいゑ死神なるべ〳〵。首縊榎などゝいひのわりて。前ふ縊死
する者の亡魂。樹下ふらゞまりて。死神とあり。人をいざうひく縊しむと。世
の語柄ふハ。ぞつまとでも。眼前ゑゝハこれゞをゞめわり。我忠義の為とゑ
ひあぐゝ。罪なき茨波と殺せ〳〵夏。ぶゝゝ悲〳〵愁る夏ふ。せめて此
女をたもけく茨波が冥福とりとむる種ともゝ。怨魂とゝぐむる便とも
ゝ〳〵と物りふうち。彼女西ふむひ〳〵掌と合せ念仏数遍こなゝ人
やど〳〵縊死んとそると。ゆれまてたゞ〳〵と声うして走り出。背後より抱
きゞむ女ハおもひかけざる夏あれば打驚き。ゆゑわりて死れば。ゝゝ者
あれがゝゝゝして死せてよ折角ゝひゝゝるものを。二度のおもひさまる人

ようつぶやきて又縊んとそるとゝゝめ一命と失んとゝゝれば
定〳〵迫ゝる夏ゝんがまゞ其縁故と語りゆへ若我力ふ及ぶ夏ゝゝ
力を尽して救ゝくゝゝふゝゝ。女情深き詞を聞。ふゝ方の情ゝ
ゝゝゝゝも誠ふ悲深ゝふせゝゝゝゝゝ其故と語ゝこゝこゝ
生ゝゝゝゝゝゝ身ゝれば。心残ふ是捨て清通くゝされかゝとのふ。三八郎
かさゝてひゝゝハ。ゝゝ知ぞの者ゝれば。卒ふ語ふハぬゝうゝべゝれど。世の
常言ふ膝ゝも談合ゝゝとふ夏ゝり。ふゝもゝれゝまゞ語りゝゝ
誠心面ふめゝゝれけゝゝ。女権思案ゝ危ゝゝ深ふ心を安下ふさん
もゝゝゝれば。一通語ゝくゝべゝん。妾ハ此辺ふ住武士の浪人の妻なる家
貧ゝふゝゝゝて先祖傳来の物と。金二十両ふ質入ゝゝゝゝ天の
妹なるものゝ少ゝゝゝゝゝれを愁ひ。二十両の金ゝと合力ゝくゝゝ

ゆへ今宵妾か彼質物を受めぐりまわれと。夫のいつの侍ふ人金ふを懐ふして出るが途中ふて盗人ふ出めひ殘らを奪ひとられ侍り合力しる妹の手前といひ。夫ふ對して分説あり。商を合ヒがとられい繼死んと見悟をきらめいりと。愁の色を面ふめりして語りけるに八郎始終を聞。それなれば死るふかるがを。幸八某少くの路銀を携へられば。其金の数ふど合力つるべしられふて質物を受ることゆへ。金ふ二十両出して与へけるが。女これをうけど誠ふ情義悲の深さ骨髄ふとかまとおがめ涙ども。所縁もあれ他方より。金ふをまうしうけしと夫ふ語べ。ありて快存じはしさらして語ざれば夫を欺ふ似て。ふのたまちたべるを。いはもめるふを死れば。ぬ弟の因果今宵ふ迫りゆとふて。れる涙灑のるしこ八郎其詞を感じ。りと跡ひ懐中の金ふ

と財布あるを取ひ。かの金とふふ入て地上ふおは。某誤て此金とらふかりおるしるを。ん弟ふ捨ひ。乃ふおちとるを拾ひ其主の出るを其物をいろ与ふる。あれ例ふあれば。ん弟二十あり金ふをうるる。恥ある。某又与ふるも恩ある。と。理を尽して与へけるふ。女感涙ちまるを。ん弟のごとれ大義悲の人ハ世ふ又とあるべるを。よも凡人ふてハはまじ。観音菩薩權ふ弟と現して。妻を救ふハるるわといひ。掌を合て再ニ拜こ。ちるるうへハ權ふ金を借用いを。後日此弟を售てあるる。返しまゆ。そも他弟ハいづくの他方ふて。姓名ハ何とまうしいそ。妻ゲ夫の姓名ひというんとせしを。八郎いとうがへしくとめいのあ。其姓名もいはは。素返済をるるるふあるを。ん弟の夫の名と変我名を語ればかのづ

る。恩を著。恩ふ著さるの理ふて某が意ふあらざ。流夜とのひ旅人の才殊ふ足弱を伴ひをいそげば。ひまどりがちし。渉縁もあらべかこひて相見めべしこいふをとゝめるの本意ふ走り入バ。女ハ涙を流しつゝ。金を押つゝぶくてそうさるめ。ちぢゝく跡を仏拝りと来しるへ急ぎ去ね

三　胸中の機関

さても右近の馬場の館ふおさてハ。其夜芳波が妹於鈴。姉の死骸を見つけて大ふ驚き。色しそくよりぐゝとけれバ。侍宿の武士等馳集り。人ふ騒動しいそぐふしゝく主君の前ふ出てもうぐゝと告さこへんバ。桂之助あわてまどひく那裡ふ到る芳波が死骸を點檢して且驚き且悲こ。何者の所為あるかと疑ひ。先於孫とめして哀の様を問るふ。彼ゝ良三八郎が殺したるよゝと告る折しも笹野鰐義いそゝく馳来こ百鰐の巻物紛失いるゝいとゝを。桂之助益驚き。館中とこまやふ穿鑿あるふ。三八郎家財ハ捨おき。妻子を携て逃去長谷部雲六も出奔の体ありとゝし。けるバ。さてハ彼等ハ人ひ合せて百鰐の巻物を盗取たるゝと。芳波ふえそぐめゝ。ぎ。せんさるゝ害し去るふうこひあゝ。足弱をとるゝひこれバよゝ遠くハ走るまじ。追人をつゝてゝ捕へんむべゝと命じけるふぞ。四方ふ手分して追行るゝ。かくて翌朝ふいさゝり。追人等立るゝ。いづくへ逃去ひやん。影ふ見へずと告るんバ。桂之助只めこれるぐゝるゝ。これさゝ不慮の騒動あるふ。取次の侍士まゝいで。御國元より。執權不破道大自筆ふの書状ハ今著駕ゝされひと告る。桂之助眉とをいめ先ぐて仇の沙汰もあるふ。乃ゝこゝゝ上京ゝいへとも心得ぐる事ゝり。行ゝやんと心安ゝべ。

待居るゝ程なく不破道犬旅装束の侍みとうち通るを見あらいふとなれば。惣髪の頭に素雪をいただき。ふりしきれる額に老の波をたゝへ高年といへども身軀もくましまして。奸佞の面野狐のごとく。貪欲の眼皂雕に類し。相貌きびしく兇悪あり。笹野蟹義。藻屑三平。土子泥助。犬上雁八等。四人の者も。跡ふつきくまうり出ね。桂之助道犬に對面し。先別事といふまで。俄の上京行度申ん氣づかひとおもせられば。道犬氣の毒敷ふひくるへ。火急の上京別義ふひらぞ。ちゝころ君侍者持あしく。旅館のおいしあく白柏子を召抱く妾とあるひとのこあるべ虚病とうまへ。佚遊宴樂ふ日を費し。御所の勤仕をおこたりあり上。官領職濱名入道殿の御内ふ達し。擯斥すべきよし御内意あり。若もうせぞんべ。御家あるかゝり其罪大殿の御身おひみべん

より。あれば。ぜんをべなく。御勘當ふの事あり大殿御自筆の罪狀御覧あるべしといひく懐中より一通の狀をとり出てさしおけば。桂之助らうめげて讀もおりまで。胸ひしこ御ぶれく大ふ後悔しひしらふふ。言あり。道犬かさまくいひくるへ。笹野蟹義。藻屑三平。土子泥助。犬上雁八等四人の者。君の御傍ふあるべ。御諫もせずいつまく故埒をもめゝくを條。其罪軽くも。切頭とあせつけらるべきなれども。大殿の御慈悲をして。後門より追払へらの裁令あること云渡しければ。四人の者ハあげ首しそこらけるる。乃太又いく。只今御次ふてうけたまられば。依こ良二八郎。長谷部雲六と合せ昨夜百蟹の巻物を盗こ。御妾友波とやうんと殺し逃去るよし。さあれ内乱の起るも總是君の御行跡よろしからざるゆゑあり。かの巻物ハ御家乃

重宝とのゝ。いまゞ室町御所の沙覽も濟ざれよ。若兒等のこゝ
ゆゝ。おん変ゆ達ーるべ。いうなる沙咎めんもそうがゝ。沙痛
ゝゝそゆへども。そゝゝ沙立退いへゆ。後日其ゆ沙へても。沙
皈恭める世ゝ取そゝゝ小ゝを出ゝ。只恙なゝおゝゝまゝゝ時の
いゝる式待ゆへゆの女の死骸ハ縁者を召叫ゝ引渡ーいべーと
いひて。先ゆの且が家来ゆ命じゝ四人の者ゆ追おせれば。桂之助
もせんかさなく。打ちゆ且ゝ出去ける。心のうちおゆひ世れく
表なり。ゆゝて乃大苑波が縁者とゝ。死骸をゝびゆ妹於孤
を引渡ー。館の財宝雑具をうちゆ。おゝわ。おゝれが家来をゝめて
守らせ。たゝちゆ皈國をいそゝべゝ
○後ゝ此時の子細を世ゆ。皆乃大が奸計より出られ

あゝ。近曾由理之助勝基。濱名入道両官領確執とのゝ。入道
勝基を打亡さん結搆専ゝゝるゝ。兼ゝ不破道大濱名入道
ゆ内通ーゝ媚諂官領の權威とゝて。奸計を施ー。佐ゝ木の
家と棄ひ。濱名の味方ゆゝゝんと約ー。兒子伴左衛門其餘
蟹義ゝゆゝひふくめゝ。桂之助ゆ放埒をゝゝめ。密ゝ濱名ゆ
告。内意をいゝせゝ基尚ゆゝゝゝゝわゝゝゝと蟹義ゝ四人の者
を追おゝ。一家中の心をゝるゝせ伴左衛ゝゝゆ他所ゆゝゝ
おゝ。ゆ不足ゝゝ扶助ーゝ。おの且ゝ目代ゝ。内外ゝゝ変ゝ
計んたゝゝゝゝ。只おの且ゝが一ゝ心ゝゝいでゝゝゝ。伴左衛ゝ苑波
ゆ亦慕ーゝゝると。雲六が巻物式盗ゝ逃去ゝ。式二ゝのゝ
ゝゝゝゝ

桂之助放伏無慙の
行跡の紅ふり
勘當もべきはし
官領職の内意めり
執權不破道犬
上京して其事を
つゝ笠野蟹義
等四人が
後門より
追拂ふ
不破道犬
土子泥助
さゝの蟹義

桂之助
犬上雅八
りくつ三平

㊃ 荒屋の奇計

山城國葛野郡松尾の近さに。梅津の里梅津川といふあり。ここに古歌に詠じたる所あり。ものこと元享の頃此里に梅津豊前左衛門清景といふ人ありけり。此所の領主なり。家富栄る武士なりける。其北月林大幢國師。洛北岩蔵の菴室に赴き尊信し法名を是財と称じ。領所のうちと附与して禪刹とせ。今の大梅山長福寺といふ乃是なり。清景の墓今に此寺にあり。初此清景の子孫に梅津嘉門といふ者あり。累代此里に住せしが漸くに零落し今嘉門が時にいたりて益困窮せ。嘉門年いまだ初老にいたらざ。聰明聚秀膽力人に過ぎ世に希有の英雄なり。曾て六韜三略に眼とさとくして。軍略の妙所ときわめ。弓馬鎗刀のたくひ。武藝の奥儀

ど暁し。天文地理神機妙算進退急門の理を得ることいふばかりなし。その由来に英名かくれなく。高禄と与へんとすれ共抱んと。懇望の諸侯おのおのはるかに仕官をすすめ。常に松尾山にのぼり。採薬して薬店にひさぐ。細煙とさて清貧をまもりて。いさぎよしとも奢の心なく。一人の老母に孝行を尽し。姿も斬髪にやつし。いとまに先祖清景大幢國師より傳来の禪味をあきなんじ。世に論らはぬ暮し。実に一世の賢士なれ知らはぬ。母も又賢女にて。今の世やうやく治平にかへるを。仕へさせべき明君なしと心を決し。嘉門が名利に屈せざるを恥じて。布と織て日々の費にかへ。いさぎよしとも貧苦を愁とせず暮しぬ。ある夜頃日彗星あらはれ。諸人心安からぬ。吉凶を辨ずるものあるべしと。一夜嘉門縁先に立出かの星をあふぎ見。母とまねきて

いひ伝へ柿我邦に彗星あらはれたるなり。皇極天皇の御宇。蘇我の入鹿
叛乱の時始て此星あらはれしより。今に至るまで一度も祥瑞あることな
し。凡彗は五つあり。其色蒼き時は王侯破れて天子兵革に苦む。赤
きは凶賊起りて国人安からず。黄なるときは女色害をなす。白きは将
軍叛て兵乱大に起る。黑きは水の精なり。洪水河に溢て五穀登らず。是
又此度の彗星。其色蒼に黄をおびたり。まことに牝雞晨しつゝ
婦女権を奪ふ。天子兵革に苦む前兆なれり。母人いかゝ。おりひ
めゆゝしとのへ。老母点頭我もらくにそめ心つきぬ。花の都狐狼の
伏土をあらんこと遠からじ。もゝく此所と去り山林にかくれて兵乱を
避るにしかゝべしゝとのひけるが。此後果して應仁の大乱起りぬ。母子
両人の先見誠に神理を助勝基濱名

入道両官領ありしが。勝基に濱名が壻にして子なきに濱名
が子を養ひけるが。勝基實子出来れば。其養子と僧となれり。両家
確執なり。濱名勝基を打亡し。おのれ権威をかしいまゝにふるま
と欲し。密に野伏浪人どもを召抱へるが。嘉門が軍略に違ひしをうら
まし。召抱んと使者を遣てのひへり。嘉門に兼て入乃が行跡をかく
し居たりしに。使者れのぶる所専官領職の権威とふるひ。無礼の詞おか
うけ。嘉門心中に憤。招に應せざるのみならず。入乃が日来の
不乃をかぞへて。さゝ〜辱めきびしくいひしるるにぞ。使者面目と
失ひ。かゝる体にて立帰る。入乃に嘉門がいひつる様を。あらまほに
告きこゆ。入乃聞もあへず大に憤發し。やとれかくさ腐儒者めうか
憂目をみせて後悔させんと。家来岩坂猪之八といふ荒男に。大力な

組子二十餘人と撰ぶへ。彼奴も智謀武術ふ秀る者あれば若手ふあまらば首ふして持うんと命ぜ。血氣ふ逸る猪之八かしこしりと答へ。小具足ふ身をかためし。彼奴たち楠が智をたくひへ義経の早業を得うとも。痩浪人の分際行衛のあらわしん。黄土小屋と踏つふ首をちのこミかてかくうんと廣言吐ば。思慮もあれ組子等いさゝをゝて相もるぶ梅津の里へ急ぎ鳴呼嘉門が身のうへ危うゝ次第なり。山時宵間の夜ありけるが。猪之八等嘉門が家ふ近づく比。月影めぐりて明あり。嘉門ハ燈下ふ書と讀壁人ぬうう障子ふうつりてたしふ見也。太で打砧の音まるハ老母の手業と出がし。猪之八等ハ竹林のうちふ身をひそめ。權便宜をうかゝ居るふ。嘉門宿島の鳴さつぐと吹つけ。ある笑止や我推量ふたがいど。命ちゝの愚人ども。我家を襲と出ばへ

たり。いで皆殺しふまくくとんぞと。灯火ふさけして其後音もなし。猪之八これと出。ふくさ奴わがつんでくるゝ。そ出ゆく搦捕て手柄ふせよ者ども下知しつ。先ふまゝて門外ふ出る邑高ゝれハ官領職の義命をかうあり。嘉門をめし捕ゝめ岩坂猪之八むふ。いちゝ門をひくに尋常ふ縄かゝとよりゝれば障子のうちふ呵くゝと笑邑し。汝等ゝ乱輩ハおろうたゝ濱名入道ゝ数百騎を以て攻るゝ更ふかゝる所ゝ。嘉門が居宅ハ鉄壁石門要害堅固の城郭も同然なり。命おしくハ頭をおさへてもゆ逃うんとわざゝらいふ。猪之八等大ふ怒門ごひゝかんとゝるふ堅ゝさ。たゝ。志やゝ力をきはめくゝとと押ふ。ゆるまりてゝろぐゝ。ゝいゆつと踏破り。大勢一度ふゝ入て。椽の上ふ花上り。障子をさつと引けば一間成ゝて梅津嘉門

梅津嘉門彗星を見て
治乱興亡を論じ
奇計を施して
捕人を皆
殺ふを

萌黄薫の腹巻のうへに。金紗の道服を著し。金作の圓鞘の太刀佩
られ。手に文曲武曲の二星を画きたる軍扇をもちて床机にかけたる
形勢。志氣堂々威風凛々たるいでたちなり。一個の英雄とみえたり。
老母はふるひたれども。摺箔の昔模様の袿衣を壺折て著し。雪をあざ
むく白髪をとられ。玉だすきをかけてうぐいす打扮。銀の蛭巻なる長刀
を小脇にかいこみて。傍に立たる姿。老木の梅に匂ひの薫殘りて
奥ゆかし。左の方に千金弩と称して。一發數十の箭を発て兵器成
るべし。右の方に近頃蠻國より渡る。盤石をも打碎く火術の具。五六挺
筒先をそろへてかゝげたり。勢こゝろ組子等。花道具に心おかん。
こゝかしこに見て猪の八色を励し。賦甲斐ある者どもなり。けづく
に嘉門一人の外はかゝるべき老女なり。たゞ三面六臂あるともぶべし。